

# 性に関するメディアリテラシー尺度の開発に関する研究

中央大学赤十字看護大学（韓国） 専任研究員

宋昇勲

## I. はじめに

インターネットは、現代社会の最も重要な情報源の一つであるが、その中では間違った情報や有害な情報も多く、青少年に好ましくない影響を及ぼす恐れがある。特にインターネット上の性に関する情報（Sexual Content on the Internet, 以下SCI）は、その数が他の有害情報より多く、内容的にも刺激的なものが多いため、その危険性が高いと言える。しかしながら日本、とりわけ学校保健領域においては、SCIへの接触が青少年の性行動に及ぼす影響を明らかにした研究はほとんどない。そこで報告者は、性行動が活発化する前の中学生期に焦点を当て、SCIへの接触が性に対する態度や行動に及ぼす影響を明らかにするとともに、そうした影響を低減する保護要因を確認することを目的とした研究を行った。その結果によれば、SCIへの接触経験は1年後の性交開始を予測する重要な要因であることが明らかになり、その接触を防止するための保護要因として、家族に関するセルフエスティームを高めることが有効であることが確認された。一方、もう一つの保護要因として仮定したメディアリテラシーに関しては、先行研究によりその可能性については示唆を得られたものの、実際の調査を通じて確認することはできなかった。その大きな理由の一つは、性に関するメディアリテラシーを測定する尺度が存在しているためであった。そこで本研究では、メディアリテラシーを測定する尺度を開発し、その有効性について検討を行うことを目的とする。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象及びデータ収集

調査は新潟県村上市のA中学校において2014年2月に実施した。原則として調査対象クラスの担任に実施を依頼し、調査実施方法を統一するために調査実施者用の手引書を作成し、必要な内容以外の説明は行わないように求めた。分析対象者数は492人であった。

### 2. 調査内容

1) 性に関するメディアリテラシー（以下、MLS）：性に関するメディアリテラシーに関しては、ワシントン州立大学のメディアリテラシープログラム（Take It Seriously: Abstinence and the Media）を評価するためにPinkletonらが作成した尺度を参考に18項目を作成し、健康教育の専門家による内的妥当性の検討を行った。さらに、パイロ

ットの結果から要因分析を行い、最終的に10項目を抽出した。10項目は2つの尺度に分類された。作成した項目は表1に示す。

表1. メディアリテラシー尺度の内容

---

尺度1 メディアの性描写（場面）を好む（以下、MLS1）

2. 私は、広告の登場人物がセクシーであれば、その商品に対する関心が高くなる。
  4. 私は、登場人物がいちゃついている広告が好きだ。
  5. メディアの中のセクシーな登場人物はかっこよく見える。
  6. 私は、登場人物がいちゃついている広告に気がひかれる。
  7. 自分の好きな広告の中には、登場人物がいちゃついているものが含まれている。
  9. メディアの中のセクシーな登場人物は楽しそうに見える。
  - 10. メディアの中のセクシーな登場人物は幸せそうに見える。**
- 

尺度2 メディアの影響認識（以下、MLS2）

---

1. メディアメッセージは、自分の学校の生徒たちの性行動に対する考え方へ影響する。
  3. メディアメッセージは、十代の子どもたちの性に対する考え方へ影響する。
  8. メディアで描写される性行動は、自分と同じ十代の性行動へ影響する。
- 

2) その他の項目

①喫煙飲酒に関するメディアリテラシー尺度（以下、MLA）

②ライフスキル：家族に関するセルフエスティーム（以下、SE家族）

全般的なセルフエスティーム（以下、SE全般）

社会的スキル（向社会的スキル、引っ込み思案行動、攻撃行動）

意志決定スキル

③危険行動：生涯キス経験、生涯喫煙経験、生涯飲酒経験

④性に対する態度：性交に対する態度

性に関する自己効力感

⑤SCI接触経験

3. 分析方法

作成したMLS尺度の信頼性を検討するために、それぞれCronbachの $\alpha$ 係数を算出した。次に、MLSと性に関する行動や態度との関係、他の危険行動やライフスキルとの関係を検討した。MLSと行動、性交に対する態度との関係を検討する際には、行動、態度別にMLSの得点を比較した。性に関する自己効力感及び他のライフスキルとの関係は相関分析を用いて検討した。最後にキス経験を従属変数とした多重ロジスティック

ク回帰分析を行い、性行動に影響を及ぼす要因を検討した。

### III. 結果

#### 1. MLS尺度の信頼性

MLS1の7項目のCronbachの $\alpha$ 係数は、全体=.897、男子=.904、女子=.873であった。パイロット調査時は全体=.927、男子=.947、女子=.873であった。MLS2の3項目のCronbachの $\alpha$ 係数は、全体=.733、男子=.726、女子=.745であった。パイロット調査時は 全体=.812、男子=.840、女子=.767であった。

#### 2. MLSと性に関する行動や態度との関係

キス経験別MLS得点を比較した結果、男女ともにキス経験のある者はない者に比べてMLS1の得点が低かった（男子：経験者=20.5±5.7、非経験者=23.0±4.3、 $t=3.491$ 、 $p=.001$ 、女子：経験者=22.6±4.1、非経験者=24.2±3.6、 $t=2.636$ 、 $p=.009$ ）。SCI接触経験別にみたMLS得点に関しては、男子においてはSCIに接触した経験のある者はない者に比べてMLS1の得点が低かった（経験者=20.8±5.3、非経験者=23.7±4.0、 $t=5.058$ 、 $p<.001$ ）。女子においては、経験者は非経験者に比べて、MLS1得点が低く（経験者=21.7±4.5、非経験者=24.5±3.2、 $t=4.161$ 、 $p<.001$ ），MLS2得点が高かった（経験者=8.2±2.0、非経験者=7.4±2.1、 $t=-2.385$ 、 $p=.018$ ）。

性交に対する態度別にMLSの得点を比較にした結果によれば、男女ともに「お互い好きであれば性交をするかもしれない」と答えた者は「結婚するまでは性交はしない」、「そのときにならないとわからない」、「質問の意味がわからない」と答えた者に比べてMLS1の得点が低かった。MLSと性に関する自己効力感との関係に関しては、男子においては、MLS1と性的圧力を避ける自己効力感と性感染症を避ける自己効力感の間に有意な正の相関が、MLS2と性的圧力を避ける自己効力感の間に有意な負の相関が認められた。女子においては、MLS1と望まない妊娠を避ける自己効力感の間に有意な正の相関が認められた。

#### 3. MLSとライフケースル及び他の危険行動との関係

MLSと関連が認められたライフケースルは、男子においてSE家族（正）と攻撃行動（負）であり、女子において向社会的スキル（正）と攻撃行動（負）であった。MLS2と関連が認められたライフケースルは、男子においてSE全般、意志決定スキル（正）であり、女子において意志決定スキルと引っ越し思案行動（正）であった。

また男子においては、喫煙経験のある者はない者に比べて（経験者=19.4±5.1、非経験者=22.5±4.8、 $t=2.996$ 、 $p=.003$ ），飲酒経験のある者はない者に比べて（経験者=20.

6±4.9, 非経験者=23.0±4.7,  $t=3.862$ ,  $p<.001$ ) , MLS1の得点が有意に低かった.

#### 4. 性行動（キス行動）の関連要因に関する結果

キス経験を従属変数とし, 単変量分析で関連が認められた変数を独立変数として多重ロジスティック回帰分析を行った. 男子においては, MLS1, 向社会的スキル, 引っ込み思案行動, 飲酒行動, SCI接触経験が独立変数として取り込まれ, 有意差が認められた項目は MLS1, 向社会的スキル, 飲酒行動, SCI接触経験であった. そして, MLS1が低く, 向社会的スキルが高い者ほど, 飲酒とSCIへの接触経験がある者ほど, キス行動をするリスクが高かった. 女子においては, MLS1と飲酒行動が独立変数として取り込まれ, 2項目とも有意差が認められた. そして, MLS1が低く, 飲酒経験がある者ほどキス行動をするリスクが高かった.

### IV. 結論

本研究の目的は, 性に関するメディアリテラシー尺度を開発し, その有効性を確認することであった. 本研究で作成したメディアリテラシー尺度, とりわけMLS1は性に関する態度や行動, 及び青少年の性行動と関連が認められているライフスキルや他の危険行動とも関連が認められた. 特に本研究においてMLS1は中学生のキス経験の関連要因として男女共通に挙げられた唯一の要因であった. すなわち, メディアの性描写を好むことは男女を問わず重要な性行動の関連要因であることが明らかになった. そのため, 今後青少年の性にかかわる危険行動を防止するためのプログラムを開発する際には, メディアがもたらせるイメージを批判的に判断するメディアリテラシーを高めることが有効であると考えられる. 一方, 本研究にはいくつかの限界もある. まず, MLS2の尺度に関しては性にかかわる行動や態度との関連がみられなかつたことからさらに内容の検討が必要であると考えられる. また, 本研究の結果は中学校一校のみの結果であるため, 一般化するには慎重でなければならない. 今後様々な対象集団において調査を実施し, 本調査の結果を再検討するとともに, 青少年の性にかかわる危険行動を防止するためのプログラムの内容について検討する予定である.